

### 第 3 話：がんばれ！子ネコ

「ふうふうう！！」

驚いて、ミクが声がするほうに振り向くと、

「えっ。仔猫？」

先ほどの、唱太になついていた仔猫が、スキタイの羊の根元めがけて駆け抜けていきがぶつとかぶりついた。ミクは、驚いてぬこを見るが、さすがに、獣である。亜音速の突進をものともせず、果敢に小さな身体で、スキタイの羊に挑んでいる。

本能なのか、実に、狩りがうまいと、唱太は感心した。動き回る羊ではなく、動かない大樹本体の根元に、何度も、何度も、急所にかぶりついている。

「すげえ…。」

やがて、ネコの努力は報われていく。噛み付いていた樹の根元から、それこそ、鮮血のような、大樹の全体に、充分に、栄養を行き渡らせるための、水なのか、本当の血液なのか、間欠泉のように、噴き出してきて、乾いた地面を朱に濡らしながら、苦しそうに、羊は暴れだした。

「馬鹿野郎！」

唱太は、猫をかばおうとするが、亜音速から速度が落ちたとはいえ、暴れる羊たちは、あたり構わず、特攻しはじめ、根元に噛み付いてる仔猫にも、容赦なく当たり始める。唱太は、ギターを盾に、仔猫の救出に向かうが、その盾となったギターも、痛みを忘れた敵の、我を忘れた猛攻に、ぼろぼろのかけらに変わっていき、雨のように降り注ぐ中、暴れまくる羊の一頭に投げ飛ばされた仔猫も、ぽおーんと弧を描いて、宙を力なく舞い、」息を呑む唱太の手元に、投げ出されるが、受け止める甲斐も無く、両手をすり抜けて、軽い音をたてて、地面に落下し、二、三度、地面にバウンドすると、にい。と、弱弱しく鳴いて、やがて、動かなくなった。

「おい、しっかりしろよ！」

「……………」

唱太は、仔猫を手のひらで包むように抱えると、ぼろぼろになったギターと仔猫を見つめ、潤んだ目で歯を食いしばる。さっきまで、暖かった仔猫の身体が、硬直し、冷えていくのを、唱太は感じながら、身体が、怒りにぶるぶると震えてくる。そして…。

許せねえ！

移調 唱太は、仔猫の遺体をじっと見据えながら、生まれて初めての凄まじい怒りを、血を噴き出しながら、悶えて苦しみ、暴れているスキタイの羊に感じる。

「……………」

「マスター？」

ミクもまた、ぼろぼろになっていた。亜音速から、死に物狂いになったためか、ついに音を超えた攻撃に、機械とはいえ、兵器ではない身が、残念なこと、ついていけないのだ。そのうえ、マスターである唱太の思考トレースまで、うまくいかなくなってきた。さまざまな、理解できない思いが、渦巻いて、彼女の人工頭脳を混乱させる。まずい、このままでは！強制停止してしまう！

「何これ？マスター、落ち着いてください！このままだと、私…。」

怒り、後悔、謝罪…。とてつもなく、暗く熱い燃え滾るようなエモーションが、唱太からミクへ流れ込んできて、彼女のCPUの演算速度が追いつかないことを、肌で感じている。ミクは、思考トレースを、オートからマニュアルに切り替えると、唱太に指示をあおぐ。ぐったりとなった仔猫を、しっかりと抱きしめた唱太は、ゆらりと立ち上がると、ぼそっとつぶやく。

「マスター！」

「許さねえ。」

唱太の怒りに呼応して、ミクの身体も緑色のオーラを放ち始める。

すさまじいエネルギーの柱の奔流が、昇竜のように天空を貫き、ミクと唱太を護るバリアとなった。頑張ったぬこのおかげで、超音速突撃も少しかわせる程度に羊の攻撃も威力が落ちている。

「これは？」

ミクは、自分に新たな機能がアップロードされたことを感じる。  
それは、このバリア内の全物質の、超回復をうながすメロディーと、超音速の浄化の歌声を可能とする神曲を編み上げるノートと呼ばれる、全十種あるプログラムであった。癒しの歌で、第九位の神曲。医神奏楽、ラファエルノートを、試しに記譜してみる。

「第九位。医神奏楽…。記譜を開始します。」

翡翠に煌く蛍の乱舞が、ミクの癒しの歌の楽譜を、彼女の目の前に記譜していくと、ミクの口元から、コロラトゥラ・ソプラノの愛くるしい声で、緻密に紡ぎだされた癒しの神曲が、唱太の肉体に劇的なスケーリング効果を及ぼして、スキタイの羊の攻撃で傷ついたはずの、ぼろぼろの身体が急速に回復していく。それは、歌っているミク自身も、とぼっちりを受けた周囲の建物や人々も、もちろん、仔猫にも例外なく、平等に、刹那に、癒しの効果が訪れていく。

その一方で、ぼろぼろになったはずの 唱太のエレキも再構成されて、妙な形に変化してゆく。その形は、ショルダーシンセサイザーに近い。

しかも、ローランドの四十八鍵、AX-Synthというタイプに、酷似した超未来仕様の楽器が、唱太の目の前に具現化した。

「これって、ローランドのAXSYNTHBK。  
ブラック・スパークルじゃないか。」

いつか買おうと思っていた、黒いそのシンセを、  
唱太は手にとって、長いため息と共に感歎する。

普通は、AX-Synthとペイントされている箇所はまだ、  
見慣れないスイッチが並んでいるところを見ると、唱太の思っている楽器とは違うものらしい。

「それは、オラトリオ・ギアですね。」

「オラトリオ・ギア？」

「現在、思考トレースは、オートからマニュアルに切り替えています。故に手入力による演奏が必要です。そのため入力装置が、オラトリオ・ギアです。」

「それは、わかったけど、これ、どうやって演奏するんだ？」

見たところ、鍵盤も弦も存在しない。液晶画面の五線譜に、楽譜が刻まれているだけである。

「ギターを演奏するように、ピックで、五線譜をなぞってみてください。それで、演奏が可能なはずです。」

「なるほど！」

唱太は、不敵に笑うと、適当に楽譜をなぞってみると、不思議なことに、唱太の海馬に、詳細な使用マニュアルが刻まれていって、カバーが閉じるように、液晶画面が消え、平行なミクの髪の色と同じレーザー光線が、その表面に幾重にも、上から下へ走査していって、幾条もの光の弦になった。

それに、呼応して、ミクのLEDも、輝きを強め、それは、シンセサイザーから、エレキギターへと変化した。唱太は、単に使いやすい形にと、念じただけだったのだが、機体のスペックは、本家に負けず劣らず高いようだ。

「うおっ！使いやすいくなった。よおし。」

唱太はノリノリで、愛用のピックで、レーザー光の弦を掻き鳴らすと、それだけで、敵の攻撃を防ぐバリアーが、唱太とミクを包み込むように、展開された。一通りの作業の後、ミクは、唱太とうなずきあう。

「よっしゃ！反撃開始だ！」

《 つづく 》